

## 令和六年度 家族で古文書にチャレンジ

ホームページにこのコーナーを設けて四年目となりました。古文書というと古めかしくて意味が分からないと敬遠されやすいのですが、読めるようになる楽しくなってきます。

いきなりくずし字がある古文書を示すと、難しく感じてしまうため、このコーナーは、おもに変体仮名を読みながら、昔の人が書いた文章に親しんでもらうことを大切にしました。特別な辞書を必要としません。家族のみなさんと一緒に読んでみませんか。

身のまわりをよく見ると、くずし字を使った看板、商品名などがあることに気づきます。

その多くは変体仮名を使っています。わたしたちは、ひらがなを普段何気なく使っていますが、これらは明治三十三年（一九〇〇）の小学校令施行規則によって定められたもので、「あ・い・う・え・お」のような「ひらがな五十音」がこれに当たります。この時、採用されなかった、その外のひらがなは、変体仮名と呼ばれて、今でも時々目にすることがあります。次の言葉は何と読むか分かりますか。元の漢字は「天婦羅」です。

天婦羅

答えは、「天ぶら」です。  
婦のくずし字 **ぬ** を「ふ」、**羅** のくずし字 **羅** を「ら」と読みました。この二文字は変体仮名です。



それでは、変体仮名が多く使われている和歌を読んでみましょう。出典は、明治三十年（一八九七）七月九日に発行された『小倉百人一首』（内藤彦一編輯）です。小学校令施行規則が制定される前に発行された本ですから、変体仮名がたくさん使われています。

今年は大河ドラマの主人公である紫式部を取り上げてみました。紫式部に関する事柄を紹介します。

# 紫式部

めぐり

あひて

みや

うま

日るぬ

ますお

むら

物

月の



## 紫式部

めぐりあひて

みしや  
[ ]  
とも

[ ]  
ぬま  
[ ]

雲  
[ ]  
くれ  
[ ]  
し

夜半の月  
[ ]  
[ ]

これは、紫式部が詠んだ和歌です。紫式部は漢学者である藤原為時（ふじわらのためとき）を父にもち、当代きつての才女で、世界に誇る文学作品『源氏物語』を書きました。紫式部が生まれた平安時代の中期は、かな文字が使われるようになり形が確立した頃に当たります。かな文字は漢字と違い一文字一音節ですから、長文の日記・物語の執筆に適していました。紀貫之の『土佐日記』以来、宮廷文学がさかんになったのは、かな文字という日本独特の文化の発達があったからです。それでは、変体仮名が含まれる紫式部の和歌を読んでみましょう。次のページに掲載した変体仮名の一覧を手がかりにして、□に当てはまる文字を入れてみましょう。



「変体仮名」の一覧①

か	く	は	へ	う	と	う	は	変体仮名
---	---	---	---	---	---	---	---	------

奈	天	津	多	曾	春	可	阿	元の漢字
ナ	テン	つ	タ	ソ	シュン	カ	ア	音訓



な	て	つ	た	そ	す	か	あ	読み方
---	---	---	---	---	---	---	---	-----

「変体仮名」の一覧②

越	王	連	里	満	者	能	尔	変体仮名
---	---	---	---	---	---	---	---	------

越	王	連	里	満	者	能	尔	元の漢字
---	---	---	---	---	---	---	---	------

ヲ ツ	ワ ウ	レン	リ	マン	は	ノ	ニ	音訓
--------	--------	----	---	----	---	---	---	----



を	わ	れ	り	ま	は	の	に	読み方
---	---	---	---	---	---	---	---	-----

紫式部

めぐりあひて  
みしやそれとも  
わかぬまに  
雲がくれにし  
夜半の月かな

言葉の意味

めぐりあふ・・・巡り逢う。めぐるは月の縁語。  
みし（見し）・・・「見す」の過去形、見たこと  
わく（分く）・・・「わかぬ」は打消、分からないこと  
ま（間）・・・時間的な意、あいだ  
雲がくれにし・・・雲に隠れてしまった  
夜半（よは）・・・夜中  
かな・・・詠嘆の意、・・・だなあ

和歌の意味

久しぶりに巡り逢ったのに、その人がどうか分からないうちに、雲に隠れた月のように去って行ってしまったなあ。

紫式部に関する頭注が『小倉百人一首』に記載されてい  
ました。□に当てはまる文字は何でしょうか。

# 源氏物語奇圖

源氏物語奇圖  
源氏物が<sup>えちぜん</sup>越前守  
為時がむ<sup>な</sup>めむらさき  
式部の所作也。母<sup>なり</sup>  
攝津守為信<sup>なり</sup>娘也。  
村上<sup>むら</sup>天皇第十の姫<sup>ひめ</sup>  
宮<sup>みや</sup>せんし内親王加茂<sup>かき</sup>  
のいつき<sup>いつき</sup>此<sup>こゝ</sup>まゆ<sup>まゆ</sup>は<sup>は</sup>備<sup>び</sup>り  
たまふとき<sup>たまふ</sup>めつら<sup>めつら</sup>か  
なる物<sup>なる</sup>      
御もとめ<sup>みもとめ</sup>    により  
上東門院<sup>かとうもんいん</sup>のを<sup>の</sup>ふせ<sup>ふせ</sup>    
かうむり<sup>かうむり</sup>式部<sup>しきぶ</sup>は石<sup>いし</sup>    
てら<sup>てら</sup> 籠<sup>かご</sup>りて<sup>りて</sup>観<sup>くわん</sup>世<sup>せ</sup>  
音<sup>ね</sup> 祈<sup>いのり</sup>誓<sup>ちか</sup>し<sup>し</sup>源<sup>げん</sup>氏<sup>し</sup>  
六十帖<sup>むそくじふ</sup>を<sup>を</sup> くり<sup>くり</sup>   
さしあけ<sup>さしあけ</sup> て<sup>て</sup>まつり<sup>まつり</sup>し  
なり。

なり。  
(後略)

源氏物語歌図

源氏物が  りは越前守

為時がむ  めむらさき

式部の所作也。母

攝津守為信  娘也。

村上<sup>選子</sup>天皇第十の姫<sup>賀茂</sup>

宮せんし内親王加茂

のいつき     備り

たまふとき<sup>給ふ時</sup>めつら<sup>珍か</sup>らか

なる物

御もとめ     により

上東門院<sup>藤原彰子のこと</sup>のを<sup>仰せ</sup>ふせ

かうむり<sup>蒙り</sup>式部は石

てら  籠りて観世

音  祈誓し源氏

六十帖を  くり

さしあけ  てまつりし

なり。

前のページの答えは、次のようになります。

源氏物語歌図

源氏物がたりは越前守

為時がむすめむらさき

式部の所作也。母は

摂津守為信が娘也。

村上天皇第十の姫

宮せんし内親王加茂

のいつきのみやに備り

たまふときめつらか

なる物がたりやあると

御もとめありしにより

上東門院のをふせを

かうむり式部は石やま

てらに籠りて観世

音に祈誓し源氏

六十帖をつくりて

さしあけたてまつりし

なり。

源氏物語は越前守藤原為時の娘、紫式部が創作したものである。母は摂津守藤原為信の娘である。村上天皇の第十女である選子内親王が賀茂齋院の任についていた時、なにか珍しい物語はないかとお求めになったので、紫式部は一条天皇の中宮・藤原彰子（しようし）の仰せを受け、石山寺（滋賀県にある寺院）にこもって、本尊の如意輪観世音菩薩に誓い、源氏物語六十帖を仕上げ選子内親王に献上した。

紫式部は、藤原道長の求めにより、一条天皇の中宮となった娘彰子の女房として宮中に入ります。源氏物語は彰子の命で作られたと説明されていますが、六十巻は誤りで、五十四の巻から構成されているというのが一般的な考え方です。





最後の問題です。紫式部は父の為時が越前国（今の福井県）の国司として着任する時、行動を共にしました。ドラマの中では、雲丹（ウニ 海胆）を好んで食べるシーンがありました。次の絵は明治十年頃、安藤徳兵衛が描いた「大日本物産図會 越前国海胆取之図」です。説明文の□には、どんな変体仮名が入るか、チャレンジしてみましよう。

海胆<sup>ウニ</sup>は當國<sup>サツマ</sup>并に薩摩<sup>サツマ</sup>にて取るものと名品と云ふ  
 肉<sup>ニク</sup>微少<sup>ミウシウ</sup>なるものほく膏<sup>アブラ</sup>  
 何<sup>ナニ</sup>う刺<sup>サシ</sup>多くして栗<sup>トリス</sup>の毬<sup>マダラ</sup>  
 小<sup>コ</sup>似<sup>ニ</sup>たり漁<sup>リヤウ</sup>人<sup>ヒト</sup>干<sup>ヒカ</sup>浮<sup>ウタ</sup>の  
 岩<sup>イワ</sup>間<sup>マ</sup>ふりとり肉<sup>ニク</sup>と採<sup>ト</sup>り  
 桶<sup>バケ</sup>に収<sup>シホ</sup>め塩<sup>シホ</sup>に和<sup>カ</sup>し  
 諸<sup>シヨ</sup>國<sup>クニ</sup>より出<sup>デ</sup>て其<sup>ソノ</sup>の味<sup>アジ</sup>  
 甚<sup>シ</sup>と佳<sup>カ</sup>あり

海胆は当国并に薩摩□て取るもの  
 を名品とす、その肉微少□るもの  
 に□膏あり、刺多くして栗の毬□  
 似たり、漁人干潟の岩間にもく  
 □、肉を採り、桶□収め塩に和  
 して、諸国に出□、その味甚□  
 佳なり

答えは順に〔に・な・て・に・り・に・す・た〕